資料１

第４回
石見神楽保存・伝承拠点基本構想検討委員会

2025年9月19日

保存・伝承拠点のあり方の整理

保存・伝承拠点のミッション（使命、意義）

再掲

ミッション	内容
①後継者の育成・確保	石見神楽の舞い手、楽人、ものづくり職人などの後継者育成につながる
②舞（保持演目）や文化の伝承	浜田の神楽団体の保持演目を将来にわたり舞うことができる 石見神楽文化を後世に正確に伝承する
③市民の誇りの醸成	「石見神楽を創り出したまち浜田」を市民が正しく理解し、誇りにつながる
④情報のハブ	石見神楽に関する情報や人が集まり、拠点を中心に広がっていく 石見神楽に関する各地への案内も行う
⑤魅力の発信	より多くの市民や市外の人に石見神楽の魅力が伝わる
⑥用具や資料の保存・収蔵	市内にある貴重な石見神楽に関する用具や資料を保存し、散逸を防ぐ
⑦調査・研究	石見神楽に関する調査・研究を行い、価値を明確化することができる

保存・伝承拠点のあり方の整理

保存・伝承拠点のビジョン・コンセプト（めざす姿）

―石見神楽のすべてがわかる、浜田市民が誇れる拠点―

この拠点は、浜田の宝である**石見神楽を「守り」「伝え」「未来へつなぐ」**ための施設です。
具体的には、「**伝統的な石見神楽の舞の文化」や石見神楽団体、石見神楽関連産業、ものづくり技術を後世に伝承**することを目的に、市民一人ひとりにとって身近で親しみやすい場所を目指します。そして、**地域の誇りとして、内外に自信を持って紹介できる拠点**をつくります。

拠点の中心的な役割は、**石見神楽の舞・楽人・用具などやそれらを構成する石見神楽文化の保存・伝承**です。そのためには**後継者の確保・育成**が不可欠です。子どもや若者が憧れ、「かっこいい」と感じるような体験、学びの場を整え、石見神楽の舞や文化を継承する人材を地域全体で育てます。

そのため、学芸員等による調査・研究にも取り組み、文化としての厚みを蓄積し、それを基にした石見神楽を深く知ることができる**体験・学習プログラム**や**展示等**を通じて、市民が「石見神楽を創り出したまち浜田」を正しく理解し、誇りを持つきっかけを提供します。

さらに、市内の神楽団体、ものづくり職人、観光関係者、学校、行政などが連携し、**情報や人のつながりが集まり・広がる「情報のハブ」としての機能**を担います。石見神楽に関する最新情報や知見が行き交うことで、浜田市の地域振興を支えるエンジンとなります。

第一のターゲットは浜田市民です。市民自身が石見神楽を学び、楽しみ、日常的に関わることで、石見神楽に誇りを持つことができる施設となり、ひいてはそれが観光誘客にもつながります。**文化振興と観光振興が一体となった「市民発の魅力発信」**がここから始まります。

石見神楽文化の保存・伝承という目的を大切にしながらも、**持続可能な収益性確保の仕組み**も工夫していきます。

保存・伝承拠点のあり方の整理

保存・伝承拠点として必要な機能

前項のビジョン・コンセプト（めざす姿）を実現するための必要機能として、以下の機能に区分し、目標、取組方針及び実現手法について取りまとめます。

※「伝承」は各機能の具現化を通じて目指すものと位置づけ、個別機能からは削除

①収集・保存機能

石見神楽に関する資料・用具・記録などの収集を体系的に集め、後世に伝えるために適切に保存・管理する機能

②調査研究機能

石見神楽に関する専門的な知見を蓄積し、地域や社会に還元する機能

前回検討委員会（8/8）グループワーク

③展示機能（体験・学習）

市民や来訪者が石見神楽の魅力と奥深さを多角的に理解できるように表現・公開する機能

④教育・普及機能

市民の理解と誇りを育み、次世代への伝承につなげる機能

⑤交流機能

人と人、人と文化をつなぎ、石見神楽を通じた地域内外のネットワークを築く機能

上記の5つの機能の達成により、**「伝統的な石見神楽の舞の文化」や石見神楽団体、石見神楽関連産業、ものづくり技術を後世に伝承**

第３回検討委員会グループワーク結果

A：展示機能（体験・学習）　市民や来訪者が石見神楽の魅力と奥深さを多角的に理解できるように表現・公開する機能

【目標】石見神楽の全てがわかり、「石見神楽を創り出したまち浜田」を正しく理解し、市民が誇りを持つ

【取組方針】
- 常設展示と企画展示を組み合わせて、何度訪れても発見がある構成とする。
- 解説やナビゲーションには多言語対応や子ども向けの視点も取り入れ、幅広い層に対応する。
- 実物資料とデジタルを活用した展示を組み合わせる。
- 研究成果を展示や教育、出版、ウェブ等で発信し、広く活用する。
- 実物資料や映像、音、ストーリーパネルなどを活用し、舞や奏楽に加えてものづくりにも焦点を当てた展示を行う。
- 見るだけでなく、臨場感があったり、触れたり聴いたり五感で体験することのできる展示とする。

【実現手法】
- 企画展示室の確保
- 基本ターゲット（子ども・大人？）
- 多言語解説
- 面、衣裳、蛇胴など神楽用具の実物の展示
- デジタル技術（タブレットやスマートフォン）を使用した展示
- 舞台裏を支える人々に着目
- 製作過程の展示、制作場所の映像
- プロローグでの臨場感ある体験
- 実際に面にさわったり、太鼓を叩いてみたりという作る・演じるの疑似体験

【グループワークでの意見】

企画展示室について
- 展示施設を計画する際に企画展示室の設置は必須である
- 企画展の運営は学芸員一人では対応に限界がある。大学生や市民との共同体制が必要
- 企画展示のテーマは神楽だけでなく、浜田の歴史・文化・自然など幅広く設定すべき
- 企画展示は年間3本程度が現実的（調査研究1本、他2本は要検討）

展示のターゲット設定
- 基本ターゲットは小学校6年生の子どもに設定（小学6年生が理解できる内容にしておくと、幅広い年代が理解できる内容となる）
- 多言語対応は英語を基本とし、スマホアプリでの対応も検討
- 外国人の場合、言語よりも文化的な違いを理解させる説明が重要

実物資料とデジタル展示
- 実物資料をメインとし、デジタルは補完的に活用
- 3D技術などは壊れやすく、ランニングコストが高い
- 優秀なデザイナーを起用し、定期的に展示の見せ方を変更することで新鮮さを保つ
- 実物資料でも見せ方次第で印象が大きく変わる

体験コーナー
- 衣裳に触れたり、太鼓を叩いたりする体験が重要
- ものづくり体験（弓作り、鬼棒作りなど）も効果的
- 体験コーナーはスペースを取るが、設けるべき
- 衣裳の重さを感じる体験も印象深い

浜田市民の疑問への対応
- 「今さら聞けない」疑問（六調子と八調子の違いなど）を集めて展示することで、神楽に対する理解が深まる
- 各神楽団体の個性や特色、成り立ちを紹介
- 島根県が制作した神楽PVや既存映像資料の活用
- 浜田で神楽が普及した理由（和紙文化など）の展示も重要

その他の意見
- 空間演出で暗闇が多いと、子どもには怖い可能性がある
- 多様性も石見神楽の特徴として表現すべき
- 企画展示の際は必ず図録を作成したほうがよい

第３回検討委員会グループワーク結果

B：教育・普及機能　市民の理解と誇りを育み、次世代への伝承につなげる機能

【目標】学校のふるさと郷育などで利用できるとともに、市民が何度も利用する

【取組方針】
- 子どもや若者が石見神楽に親しむワークショップや体験教室を開催し、演じる・作る・知る機会を提供する。
- 学校教育と連携し、ふるさと郷育として石見神楽（継承する人物など）を取り扱う際のサポートをする。
- 子どもだけでなく大人に向けた解説講座や公開練習なども展開し、世代を超えた普及を図る。
- SNSやメディアを通じて、石見神楽の「かっこよさ」やストーリー性を発信し、特に若年層の関心を喚起する。
- 石見神楽の要素を活かした商品開発や映像・アートとのコラボレーションなどにより、裾野の拡大を図る。

【実現手法】
- 担い手やプログラムの構築
- 体験場所（練習場や工房）の確保
- コンテンツの作成、担い手の確保
- 専門家との連携、コーディネイターの確保

【グループワークでの意見】

ターゲット設定
- 市民を一義的なターゲットとし、何度も利用したくなる拠点へ
- 観光客向けには教育旅行・体験旅行の位置づけを想定

体験の重要性
- 神楽面に触って毛の違いを比べる、神楽衣裳を着てみる、火の熱さを感じる、など、デジタルではできない体験・体感を重視

ものづくりと文化財指定
- 石見神楽のものづくりはオリジナルであること、材料も地元のものを使っていることなど、価値を発信
- 文化財指定に向けて行政も努力し、拠点の価値を高め、誇りを醸成

学校教育との連携、子ども向けの取組
- 学校や教員の考えに左右されるのではなく、教育委員会で方針整理
- 来てもらうための交通手段の確保が重要
- 強制的に触れる機会を作り、そこから興味を持った子を呼び込む
- 神楽好きの子どもの拠り所になることを目指す

大人向けの講座
- 市民にとっては身近すぎるため、ターゲットは市外の関心層
- 初心者向けからマニアックな内容まで段階的な講座を実施
- 神楽検定などの専門的な講座も効果的

情報発信拠点としての機能
- 浜田市内に点在する石見神楽の情報や各神楽団体の情報を集約し、各地に出かけるきっかけづくりを促す
- 石見神楽以外の神楽も紹介することにより石見神楽の特徴を明確化

周辺環境の整備と活用
- アクアスの運営手法を参考にした周辺環境との連携
- 公園や遊び場など、子どもが遊べる環境も重要
- 美又温泉など浜田市内のコンテンツとの連携

変化・更新のあるコンテンツ
- 面白い・楽しいを入口に、変化・更新しながら繰り返し来てもらえる工夫が必要
- VR技術などを活用した段階的なコンテンツ更新
- 川崎麻央さん、福岡ユタカさんなど浜田にゆかりのあるアーティストとのコラボレーション

市民参画・協働について
- 教育・普及機能から担い手作りにつなげるのは難しい
- 学芸員や教員経験者の配置
- 神楽愛好者、教員経験者、既存の活動団体などの活用
- 福祉との融合（高齢者向けプログラム等）など異分野との連携

第３回検討委員会グループワーク結果

C：伝承機能　「伝統的な舞の文化」や石見神楽団体、石見神楽関連産業、ものづくり技術を後世に伝承する機能

【目標】石見神楽文化・舞や道具に関する技術の伝承、企業・団体の伝承（後継者の確保・育成）	
【取組方針】 ● 各神楽団体において古くから継承されている伝統的な舞を後世に伝承する。 ● 夜明け舞など多くの演目を舞うことができるための環境を整備する。 ● 石見神楽団体、石見神楽関連産業の後継者を育成・確保するための取組を行う。	**【実現手法】** ● 展示機能の中で検討 ● いつでも練習ができる場の確保 ● 展示や教育・普及機能の中で検討

【グループワークでの意見】
伝承機能の基本方針
- ライブ公演が最も効果的
- 舞を披露し、鑑賞してもらうことで石見神楽文化を伝承できる
- 子どもたちは「ヒーローのように主役になって踊りたい」と思って練習している
- 憧れの場としての機能が重要

C：交流機能　人と人、人と文化をつなぎ、石見神楽を通じた地域内外のネットワークを築く機能

【目標】多くの市民、市外の方に石見神楽の魅力を知ってもらう	
【取組方針】 ● 地元神楽団体の交流や合同公演、体験イベントを通じて相互理解を進める。 ● 舞殿や工房など、来訪者と演者・職人が出会う場を設け、日常的な交流を生み出す。 ● 拠点自体が石見神楽に関する情報のハブとして機能し、各地の活動や知見が集まり、共有・発信される場となる。 ● 他地域や異分野とのコラボレーションや、新たな担い手が創造的に関われるフィールドを提供し、石見神楽の新たな挑戦と誇りを生み出す。 ● 石見神楽に関わる技術や資源を活用したビジネス化・観光化を図り、地域経済の活性化にも寄与する。	**【実現手法】** ● 伝統的な舞を可能な限り、伝統的な空間で見せることができる場 ● 新しい挑戦をみせることができる場 ● 交流などを促進するレセプションルームなどの確保 ● 民間企業等と連携

第３回検討委員会グループワーク結果

【グループワークでの意見】

交流機能の基本方針
- 石見神楽に特化した観光と文化継承の拠点
- 石見神楽を志す人や他地域から憧れる拠点
- 浜田市のプライドをかけて作る

拠点と奉納神楽の関係
- 公演と神社の奉納神楽は次元が違う、棲み分けが必要
- 拠点で見た人が奉納神楽に行きたくなるような関係を構築
- 観光客の取り合いを避けるための調整機能も必要

本物の舞を見せる空間であるべき
- 伝統的な神社の雰囲気を再現した空間
- 防音設備を備えた環境
- 座敷席（椅子ではない）での鑑賞
  （大相撲のような形態、能楽堂のようなイメージ）
- 飲食可能な空間
- 各団体のこだわりを表現できる環境

新しい挑戦の場
- 月1回の夜明けまで舞うような特別な取り組み
- 団体の周年事業や記念公演の実施
- 新しい挑戦や実験的な演目の披露も可能な場
- 各団体のこだわりを表現できる空間

公演の頻度と運営
- 週末（金・土・日）を中心とした定期公演（週1回程度）
- 毎日は困難
- 平日は多目的利用も可能な空間設計を行う

解説付き公演
- 解説付き公演や副音声による解説の実施
- 演目の内容やエピソードを求める観客が多い
- 視覚的な解説は舞の邪魔になるため、耳からの情報提供を重視
- 歌舞伎のような解説システムの導入

規模と収容人数
- お宮の境内で見るような雰囲気から始める
- かぶりつきで見られるような近距離での鑑賞環境
- 大人数が鑑賞するようなイベントは公演はホールで実施

運営と採算
- 高額な施設のため、採算も考慮が必要
- 神楽団体の調整による運営体制
- ランニングコストやマネジメントの重要性
- 観光と文化継承のバランス
- 神楽団体の連絡協議会との連携による運営体制

その他の意見
- 三宮神社での定期公演との関係は？
  三宮神社をこの先いつまで使うことができるか不明。原則的には定期公演（伝承、観光）は拠点施設を想定する。
- 地域の神社での奉納神楽は地域の皆さんで実施
- 拠点施設ができれば新たな舞の見せ方が可能

将来を見据えた環境整備
- 50年後の将来を見据えた環境整備（神社では舞えなくなる可能性あり）
- 神社での奉納神楽が困難になった場合の代替環境
- 大学生など若い世代の練習場としての活用
- 公開練習の実施（見学しながらの説明付き）

保存・伝承拠点の機能ごとの具現化の方向性

③展示機能（体験・学習）

市民や来訪者が石見神楽の魅力と奥深さを多角的に理解できるように表現・公開する機能

【目標】

石見神楽の全てがわかり、「石見神楽を創り出したまち浜田」を正しく理解し、市民が誇りを持つ

【取組方針】

- 常設展示と企画展示を組み合わせて、**何度訪れても発見がある構成**とする。
- 解説やナビゲーションには多言語対応や子ども向けの視点も取り入れ、**幅広い層に対応**する。
- **実物資料とデジタルを活用した展示**を組み合わせる。
- 研究成果を展示や教育、出版、ウェブ等で発信し、広く活用する。
- 実物資料や映像、音、ストーリーパネルなどを活用し、**舞や奏楽に加えてものづくりにも焦点**を当てた展示を行う。
- 見るだけでなく、臨場感があったり、触れたり聴いたり、**多様な感覚で体験**することのできる展示とする。

展示コンセプト

受け手からつなぎ手へ–石見神楽を未来へ継ぐ拠点

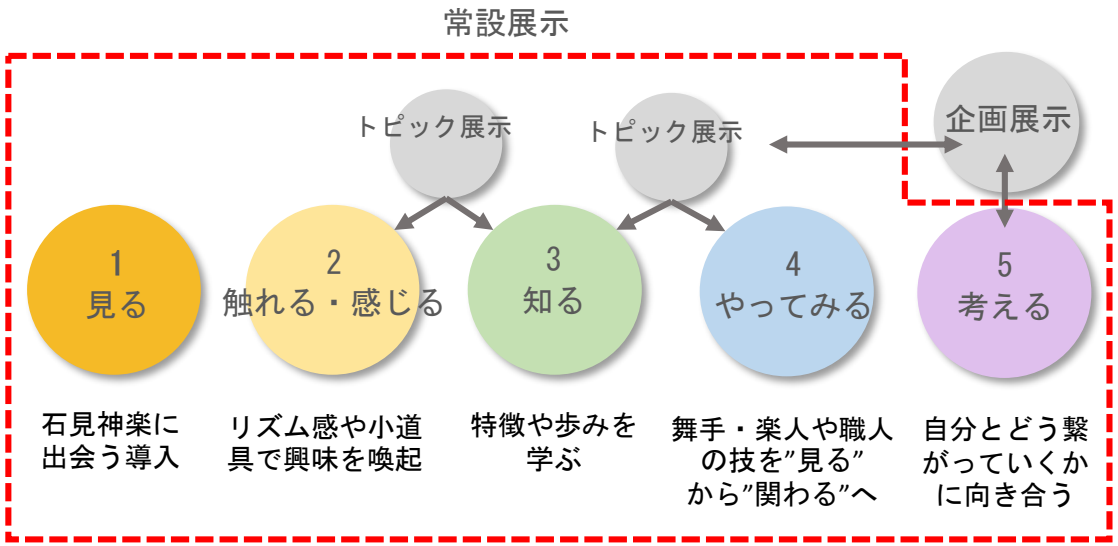
本拠点の目的は、ビジョン・コンセプトで掲げている『石見神楽を「守り」「伝え」「未来につなぐ」』である。

展示機能では、市民をはじめ、石見神楽に触れたことがない市外の方々や子どもなど様々な来館者が「受け手」として楽しむだけでなく、拠点での体験を通して、より多くの来館者が石見神楽に興味を持ち、担い手になったり、支えたりする**「石見神楽をつなぐ人々」**になりたいと思えるような構成とする。

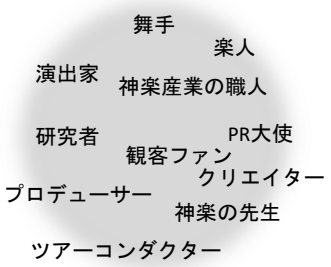
わかりやすい展示を目指し、小学６年生程度が理解できる表現を基本とするとともに、誰でもが展示内容を理解できるように、多言語対応や視覚、聴覚障がい者などに配慮する。

展示ストーリー

石見神楽に親しまれてる方から初めてご覧になる方までが
石見神楽を学び、自分事化するまでの過程を５つのフェーズを通して体験する構成とします。



石見神楽をつなぐ人たち



来館者が、石見神楽の舞い手や担い手、石見神楽に関係する人や石見神楽を市内外から支える人などになることを目指す

● 常設展示と企画展示の考え方

常設展示

段階的な体験を通して、石見神楽に親しみ、歴史や技術、特徴などを実物資料とデジタル手法を交えて紹介します。

【トピック展示コーナー】
常設展示エリア内に更新可能なコーナーを設け何度訪れても発見がある展示とします。

企画展示

テーマは浜田の歴史・文化・自然など幅広く取り扱い、浜田にゆかりのあるアーティストとコラボするなど、新たな切り口で石見神楽や浜田の魅力を訴求します。常設展示の「考える」やトピック展示と連動した企画も展開します。

展示体験の実現手法

1
見る

非日常への入口。石見神楽と出会う導入展示。

- 囃子の響きの中で舞う人の姿や、観客の熱気、職人の手仕事などを断片的に切り取り、 石見神楽を象徴する要素として展示する。
- 導入展示部分では、緊張感や神聖さと同時に、熱量のある“かっこいい石見神楽”、さらに石見神楽への親しみやすさや多様性を印象付ける。
  - 貴重な神楽面を重厚な展示空間に配置したシンボル展示（象徴的な演出）
  - 神楽を舞う人の暖簾やゲート
  - 神楽の印象映像を投影するミニシアター、大型映像装置など

2
触れる・感じる

視覚だけでなく触覚や聴覚などをより刺激する体験。受け手と作り手の境界が薄れていく体験の始まり。

- 神楽用具（面、衣裳、蛇胴など）を間近で見たり、触れたりできる。
- 製作工程の断片や素材（石州和紙など）に触れることで、作り手の存在と工夫に気づく。

  - 衣裳の生地や刺繍に触れる展示
  - 口上や楽器の音が聞ける展示
  - 石州和紙に触れる展示
  - 神楽面に触って重さや質感を感じる展示
  - 神楽衣裳を着てみる体験

展示体験の実現手法

3
知る

石見神楽が伝承・拡散して行った背景や多くの人の手によって支えられていることを理解する。

- 石見神楽の成り立ち、特徴、他の地域や芸能との違いを知る。
- 六調子・八調子神楽の違い、演目の多さや演出の柔軟性や神楽産業などはじめての方でもわかりやすく石見神楽の特徴を紹介。
- 神楽団体やものづくり技術などの歴史・特徴を紹介、「石見神楽を創り出したまち浜田」を学ぶ。

- 石見神楽の成り立ちや特徴などを知る映像や実物展示を一望できる歴史の展示
- 演目の説明や解説したアーカイブ（記録保存と閲覧機能）⇒３Dスコープ等の活用
- 各神楽団体を紹介したアーカイブ（記録保存と閲覧機能）⇒３Dスコープ等の活用
- 奉納神楽などの鑑賞の作法など石見神楽文化の紹介
- 各種の神楽用具が一面に展示されている「神楽用具ウォール」
- 製作過程の分解展示、製作道具の展示など
- 製作風景のアーカイブ（記録保存と閲覧機能）
- 神楽産業のトピック展示（技術を活用した商品などの展示、企画展示などとの連携）

展示体験の実現手法

4
やってみる

「見る」から「関わる」へ。「もっとやってみたい」になる第一歩。

- **実際に面を塗ってみたり、囃子を奏でてみたりという作る・演じるの疑似体験。**

➢ 舞や制作の一部を体験できるデジタルとアナログのハイブリッド展示
➢ お囃子を奏でるゲーム（太鼓の達人など）
➢ 舞が体験できるゲーム
➢ 蛇胴にくるまる体験（企画展示などと連携）
➢ 神楽面の絵付け体験、弓矢や鬼棒などの制作（企画展示などと連携）

5
考える

石見神楽が自分とどうつながっていくかに向き合うきっかけづくり。

- **様々な立場から石見神楽に関わる人々を紹介。石見神楽への関わり方の幅（舞手、楽人、ものづくり）、応援（鑑賞やメッセージ）を示し、自分は石見神楽にどう関わっていけるかを考える。**

➢ 私にとっての石見神楽とは？人が語るサイネージ
➢ 「石見神楽のこれから」をテーマにしたエピローグ展示
➢ 石見神楽がこうなってほしい、こう関わりたいという宣言・応援メッセージボート（絵馬など）：成果検証

保存・伝承拠点の機能ごとの具現化の方向性

④教育・普及機能

市民の理解と誇りを育み、次世代への伝承につなげる機能

【目標】

学校のふるさと郷育などで利用できるとともに、市民が何度も利用し、石見神楽に関わる人の裾野拡大を図る

【取組方針】

- 子どもや若者が石見神楽に親しむ**ワークショップや体験教室を開催**し、演じる・作る・知る機会を提供する。
- 学校教育と連携し、ふるさと郷育として**石見神楽（継承する人物など）を取り扱う際のサポート**をする。
- **子どもだけでなく大人に向けた**解説講座や公開練習なども展開し、世代を超えた普及を図る。
- SNSやメディアを通じて、石見神楽の「かっこよさ」やストーリー性を発信し、特に**若年層の関心を喚起**する。
- 石見神楽に関する各種の情報を集約し、発信・伝達できる**情報のハブ機能**を有する拠点とする。

教育・普及の実現手法

（1）子ども向けの取組

- ふるさと郷育、学校教育における教育・普及の取組方針やプログラムについて市教育委員会で整理
- 子どもが石見神楽に触れる機会を作り、興味・関心をひろげていく
- 石見神楽好きの子どもの拠り所とする

  - ふるさと郷育の一環としての来館や学芸員などによる出前授業等の実施
  - 石見神楽教室、体験ワークショップの開催
  - 上記に関するプログラムやコンテンツ等の作成及び実施空間の確保

（2）大人向けの取組

- 市民ガイドを養成し、市民ガイドを通した普及活動により、関心の裾野をひろげていく
- 初心者向け、専門的な内容（石見神楽検定）、マニアックな内容など体系的な講座を実施

  - 親子参加型のワークショップ（舞・奏楽・ものづくり）の開催
  - 市民ガイド養成講座の実施（初心者向けから専門的な内容まで、体系的にプログラムを構築）
  - 上記に関するプログラムやコンテンツ等の作成及び実施空間の確保

教育・普及の実現手法

（3）学芸員などの配置、市民との連携・協働

- 学芸員、専門スタッフの配置
- 市民ガイド（（2）参照）、神楽愛好者、既存の活動団体（どんちっちサポートIWAMI）などの活用

  - 学芸員や市民ガイド等などによる出前授業等の実施（再掲）
  - 学芸員や市民ガイド等による定期公演や奉納神楽の解説等
  - ワークショップや体験教室などのサポート

（4）情報発信

- 市内に点在する石見神楽の情報（神楽団体、産業、関連施設、ゆかりの場所など）を一元的に発信し、各地に出かけるきっかけづくりにする。
- 文化的価値を市内外に情報発信する。
- 石見神楽の要素を活かした商品情報の拡散

  - 関連施設やイベント情報の集約化と情報発信システムの構築（ハード・ソフト）
  - SNSやメディアなどへの情報提供の充実
  - 石見神楽に関するイベントや取組の調整やマネジメント
  - 石見神楽関連商品を扱うミュージアムショップ等の設置

保存・伝承拠点の機能ごとの具現化の方向性

⑤交流機能

人と人、人と文化をつなぎ、石見神楽を通じた地域内外のネットワークを築く機能

【目標】

多くの市民、市外の方に石見神楽の魅力を知ってもらう

【取組方針】

- 地元神楽団体の交流や**合同公演、体験イベント**を通じて相互理解を進める。
- 舞殿や工房など、**来訪者と演者・職人が出会う場**を設け、日常的な交流を生み出す。
- 拠点自体が石見神楽に関する情報のハブとして機能し、各地の活動や知見が集まり、共有・発信される場となる。
- **他地域や異分野とのコラボレーション**や、**新たな担い手が創造的に関われるフィールド**を提供し、石見神楽の新たな挑戦と誇りを生み出す。
- 石見神楽に関わる技術や資源を活用した**ビジネス化・観光化を図り**、地域経済の活性化にも寄与する。

上記の取組方針を実現するためには、本物の石見神楽を見せたり、異分野とのコレボレーションを行う舞殿が必要不可欠であるとともに、各種講座や体験教室、他地域や異分野との交流スペースとなる多目的室の整備が必要

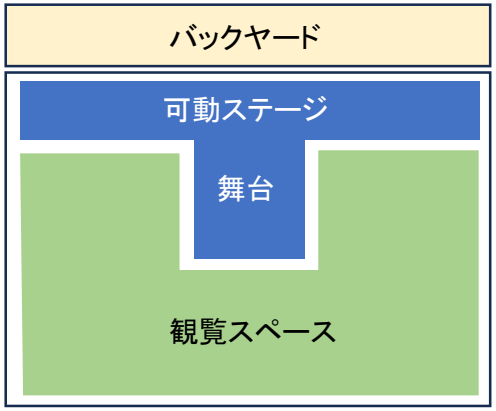
舞殿の整備　⇒石見神楽をしている人があこがれる施設
　　⇒定期公演（観光）をする施設
　　⇒各団体のこだわりを表現（文化伝承）できる環境
　　⇒他分野の伝統芸能も表現（異分野とのコラボ）できる施設
多目的室の整備⇒各種の会議や講習できる場
　　⇒体験イベントやワークショップなどができる場

舞殿のイメージ

（1）伝統的な舞をできる限り伝統的な空間で見せる環境

- 劇場で見るようなスタイルではなく、座席と一体的な空間
  （砂被り席・桟敷席⇒大相撲のような観覧空間）
- 神社の観覧の雰囲気を踏襲
  （三方からの鑑賞、天井の高さ・天蓋など）
- 飲食をしながら見れる空間
- 防音を兼ね備え、夜神楽や夜明け舞が
  披露できる

神楽上演時のゾーニングイメージ



（2）知っていることが魅力を高めるので、わかりやすい解説が聞ける環境

- 歌舞伎鑑賞のようなシステム（イヤホンガイド）の導入
  ・解説付きで神楽を楽しむ
  ・視覚・聴覚補助付きで神楽を楽しむ
  ・多言語で解説や口上を楽しむ

舞殿のイメージ

（３）新たな挑戦にも取り組めるような、多様な演出ができる環境も確保

- 比較的いつでも練習できる
- 公演ではなく、練習等の見学もできる
- 音響や照明などの充実した舞台装置
- 神楽団体が主体となった周年事業や記念公演などにも活用できる

（４）石見神楽以外の利用にも対応（他の伝統芸能などの上演）

- 多様な舞台や座席展開ができる施設づくり
  （神楽公演に主眼を置きつつ、多様な利用ができる
  ⇒可動舞台、可動座席、可動天蓋などの装置）

（５）規模・形態

- お宮の境内でみる規模⇒（200人程度）
  （大人数を集客が必要な公演は石央文化ホールで実施）

（６）管理運営の検討

- 施設利用料と鑑賞料の関連性を整理
  ※解説や演出などプレミアムな興行で高付加価値化

保存・伝承拠点の機能ごとの具現化の方向性

①収集・保存機能

石見神楽に関する資料・用具・記録などを体系的に収集し、後世に伝えるために適切に保存・管理する機能

【目標】

石見神楽に関する貴重な用具が散逸しないように収集し、保存する

【取組方針】

- 衣裳・面・蛇胴などの神楽用具や資料・写真・映像・音声などを収集し、**デジタル化も含めて保存**する。
- **神楽団体の保持演目や地域ごとの特色、演者の証言などをアーカイブ化**し、いつでもアクセス可能な形で保存する。
- **保管・展示可能な環境**を整備し、資料の劣化を防ぐ。
- 収蔵庫で収蔵した用具について、**バックヤードツアー**などで見学できる

収集・保存の実現手法

（1）資料などの情報収集

- 市内に存在する、保存すべき用具や資料（写真、映像などを含む）を調査し、把握する。
  - 神楽団体からの情報提供及びその確認
  - 個人や団体、企業などが保有する情報や資料などの情報収集

（2）収蔵庫の確保

- 余裕を持った収蔵庫を確保する。
- 温度、湿度管理できる収蔵環境を確保する。
- 公開することを前提とした収蔵形態とする。
  - 情報収集結果を踏まえ、拠点で保存すべき資料などの整理・選定
  - 上記に基づく規模や形態の設定

保存・伝承拠点の機能ごとの具現化の方向性

②調査・研究機能

石見神楽に関する専門的な知見を蓄積し、地域や社会に還元する機能

【目標】

石見神楽の歴史や、石見神楽に関する用具を調査・研究しその価値を明らかにする

【取組方針】

- 歴史的背景、演目構成、地域的な違い、用具の技術・素材などを**専門家や学芸員が継続的に調査・研究**する。
- 石見神楽に関する**古い用具等の価値を明らかに**する。
- 大学や研究機関との連携により、外部の知見も取り入れながら**研究**する。
- 調査研究した情報を**神楽関係者をはじめ、市民や観光客に発信**する。
- 全国の神楽との比較や違いについても研究し、全国の神楽の中での石見神楽の位置づけについて整理する。

調査・研究の実現手法

（1）人材の確保

- 専門的な知識をもつ職員を配置する。
  - 学芸員や同等の知識や研究意欲のある職員を登用し、配置

（2）石見神楽及び関連産業の価値の明確化

- 石見神楽のものづくりのオリジナリティ・価値の明確化
- 全国の神楽から見た石見神楽の位置づけを整理し、石見神楽の特徴を明確化

（3）外部団体などと連携した研究

- 島根県立大学等の大学や研究機関との連携
- 郷土の歴史・文化などの研究機関との連携
  - 研究内容の共有、体系化等
  - 文化財指定に向けた文化的価値の明確化

（4）研究成果の公表

- 展示や講演などにより調査研究成果を公表
  - 企画展示やトピック展示などで広く発信
  - 講習会やワークショップ体験なでの発表

（5）調査・研究環境の確保

- 収集した情報や収蔵している資料などを活用し、学芸員などが継続して調査・研究できる環境を確保する
  - 調査・研究スペースの確保

検討スケジュール

回	開催日時	内容（案）
第１回 ※委託業務外	5月29日（木） 18:30～	会長・副会長の選任、石見神楽保存・伝承拠点基本構想検討委員会の検討事項 石見神楽の保存・伝承拠点に必要と考える機能や展示・活用方法等についての意見交換
第２回	7月11日（金） 18:30～	基本構想の方向性について意見交換：①拠点のあり方、必要な機能についての意見交換 （第１回の意見交換を踏まえて）
第３回	8月8日（金） 18:30～	基本構想の方向性について意見交換：①拠点のあり方、必要な機能や内容の整理・共有 （第２回の意見交換を踏まえて） ②拠点の活用に関する意見交換（グループワーク） （展示、教育・普及、伝承・交流）
第４回	9月19日（金） 18:30～	基本構想の方向性について意見交換：①拠点の活用に関する意見交換（全体会議方式） （第３回の意見交換を踏まえて 展示、教育・普及、交流機能の実現方法の確認） （収集・保存、調査研究機能に関する意見交換）
第５回	10月16日（木） 18:30～	基本構想の方向性について意見交換：①第４回検討会の意見を踏まえた修正案の共有 ②運営方式・運営体制に関する意見交換（全体）
第６回	11月18日（火） 18:30～	基本構想案について意見交換　①運営方式・運営体制に関する修正案の確認（全体） ②基本構想に関する意見交換
第７回	12月9日（火） 18:30～	基本構想案の修正・確認
第８回	第７回の検討状況に応じて開催	基本構想案の最終調整・了承